

地方でデザインの仕事をすること。鳥取だからできること、鳥取だからしたいこと。〈タイトル写真〉

児玉「ここがデザイン会社の m&m.co さんか～！なんかおしゃれな建物だねえ！」

對馬「ほんとだ。鳥取っぽくない！」〈写真①〉

児玉「今日は社長さん直々対応してくれるみたいだよ。さっそくお邪魔してみよう。」〈写真②〉

#### 【m&m.co 代表取締役 本山博之さん】

児玉・對馬「こんにちは！今日はよろしくお願ひします！」

本山「よろしくお願ひします！どうぞどうぞ！」〈写真③〉

児玉「今日は社長さん直々にお会いしていただきありがとうございます。さっそくなんですが、m&m さんってどういった会社さんなんですか？」

本山「うちはいわゆる広告代理店です。業者さんから依頼されて広告を作ったり、映像を作ったりしています。」

児玉「本山さんはもともとデザインの勉強などをされていて、m&m を立ち上げたのでしょうか？」

本山「専門学校なんかは出ていないですよ。」

児玉「えっ！デザインって専門的に学ばないとできないものかと思っていました！」〈写真④〉

本山「全然！うちの社員も全員、普通の学校出身ですよ。」

児玉「そうなんですか?!」

本山「うん。学生だった当時、僕たちの世代でトレンドだった、村上龍の『69』という本があって。村上龍の学生時代のお話が描かれた本なんだけど、『69』では情報発信やイベントをすとかそういうのがすごくカッコよく描かれていて。そのまねごとをして映画を作ったりしていたのがきっかけかなあ。すごく楽しかったっていう記憶があるよね。」

對馬「その経験が今のお仕事に繋がっているのですね！」

本山「そうですね。大学卒業後は地元鳥取の新聞社で働いていたのですが、知り合いつてに映像制作の依頼をちょくちょく受けていたら、一人なら食べていけるくらい依頼が増えてきて（笑）そのタイミングで独立しました。だから、デザインの仕事をすつもりはなかったんだけど、結果的に仕事になったって感じかなあ。」〈写真⑤〉

#### 【小さな規模だから、感じられる喜び】

児玉「現在 12 年目という m&m さんですが、うちの会社のこんなところがいいよ！っていうところがありますか？」

本山「そのあたりは実際に社員に聞いてみないとわからないよね。（笑）おーい！」

宇多川「はい。こんにちは！」

児玉・對馬「こんにちは！」

宇多川「鳥取大学の地域学部OBの宇多川浩司です。」〈写真⑥〉

本山「うちの会社のいいところはどこですか?って聞かれて（笑）」

宇多川「なるほど（笑）そうですね。僕は以前大阪のイベント会社に勤めていたことがあったんですが、都会の大企業って、本当に分業分業なんですよ。細かいところだと、イベントの道路申請をすだけ

の会社があったり！」

對馬「そんな細かく?!」

宇多川「そうなんです。逆にこっちでは、お客さんと話をすところから、リリースまで一貫して舵取りをしているんですよ。実際に自分で手を動かしながら最後までやれるっていうのはうちの強みだと思います。」〈写真⑦〉

児玉「少数精鋭の会社さんだからこそできることですよ。」

宇多川「パソコンに向かい合って作業をしているだけじゃ見えないものってあるんですね。机上の空論にならないで、現場感をもって落とし込めるっていうのはいいなって。」

對馬「宇多川さんの的にはどちらの働き方が好きですか？」

宇多川「そうですね一、大阪や都市部の会社では、リリースまでに何社か嘯まなきゃいけないんですよ。僕は一番最下層の会社だったので、そこに至るまでに伝言ゲームのようになって、お客さんの本当にやりたいことが見えてこなかったり、どうしても作業感がにじみ出てしまうことが多いのかなあって。反対にここではクライアントの方から直接聞きだして自らの手で最後までできるので、僕は今の働き方がいいなあって。」

児玉「確かに、お客さんとの距離が近くて、生の声を聴けるっていうのはいいなあって思います。」〈写真⑧〉

#### 【鳥取でデザインの仕事をすということ】

對馬「そういえば、ずっと気になっていたんですけど、デザインのお仕事って、どうしても都会のイメージが強いのですが、鳥取でデザインのお仕事をすのって実際どうなんですか？」〈写真⑨〉

本山「そうだね。やっぱり鳥取に比べたら東京は次元が違うよね。東京に居たら、着る服も変わってくるし、東京の人たちってみんなこぎれいだよね。」児玉「確かに、東京の人たちってみんなかわいにかっこいいですよ〜！」

本山「鳥取とかローカルなところは、デザインの価値や意識がどうしても低いんだよね。低いから東京のようなそういう文化が育たないんです。やっぱりこういう仕事をしている身として、文化を育てていきたいっていう意識はあるよね。」〈写真⑩〉

児玉「文化…。」

本山「デザインって7割の人はどうでもいい。なんとも思わないんですよ。残りの3割の人たちがいいデザインだなって思うわけだけど、僕たちがやるのは、そこの割合を増やしていくこと。そこが増えていけば、クリエイティブなものを見る価値ってどんどんあがっていくよね。」

#### 【鳥取でもデザインへの意識を創っていきたい】

本山「鳥取でね、インターンシップフェスティバルがこの前あって。うちもブースを出していたんだけど、多くの学生さんたちが来てくれたんだよね。」

児玉「あ！私も行きました！m&m さん、すごく目立ってましたよね！目を引く黄色の壁におっきなモニターがあって。」〈写真⑪〉

本山「そうそう。でも、はっきり言ってとくに大したことはしてないんだよ。こんな風にいったらあんまりよくないかもだけど、鳥取のデザインの全体のレベルが低いってことでもあると思う。もっと全体

のレベルを競い合っていけたら、学生さんもいろんなところに興味を持つことができると思う。」

對馬「確かに、東京で行われているような大きな説明会にいったら、やっぱり鳥取とはかなりの違いがあるよね。どこも目を引く工夫がされているし。」

児玉「でも、鳥取にいたらそれが当たり前に感じてしまうなあ。」

本山「ですよ。僕は、そうさせたくない。そうさせたらどんどんレベルが落ちていっちゃうので。デザインにはこういう価値があるんだよっていうのを私たち広告代理店が伝え続けたい。」

児玉「鳥取にずっといたらわからないけれど、鳥取のレベルの説明会に行った後に東京にいったら、正直、やっぱ東京いいなってなっちゃいますよね。」

本山「うん。どういう観点からも鳥取のデザインへの意識をちょっと上げていきたい。鳥取で道を歩いていて、「あ！これいいな！」って思うことってあんまりないと思うんですよ。それがどんどん増えていけばいいなあとは思。文化を作るといって大げさだけど、そういうところに価値を見出してもらうことが大事なのかなって。」〈写真⑫〉

對馬「本山さんのお話を聞いていたら、デザインってその土地の魅力をあげる立派なひとつの手段なんだなってわかってきた気がする。」

児玉「そうだね。鳥取でデザインのお仕事をする意味って、思った以上に大きな価値のあることなのかもしれない…。東京ではできない、鳥取だからこそやりがいや価値もあるんだね。」

児玉・對馬「本山社長、宇多川さん、今日は本当にありがとうございました！」

#### 【編集後記】

きらびやかなイメージのある、デザイン業界。私たちの周りでも、広告やデザイン業界へ憧れを感じる人も多いです。しかし、そのほとんどは東京での仕事。地方、ましては鳥取でわざわざデザインの仕事をしようと思う人はなかなかいないと思います。しかし、だからこそ、鳥取でデザインの仕事に携わる意味や価値があるのだということを実山さんや宇多川さんから気づかせてもらいました。

日常にあふれているデザインだからこそ、その与える力は思った以上に大きく、街の魅力の一つにもなりうるものです。

東京のきれいな街できらきらと働くことも魅力的ですが、地方や鳥取で街を変える手段として、お客さんの顔を見て自らの手で創ってゆく。そんな働き方もまた魅力的なのだと思うことができました。

ぜひ、デザインに興味のある方はm&mさんを訪れてみてほしいと思います。



【以下、とりナビ掲載時挿入写真】

タイトル写真



写真⑤



写真⑩



写真①



写真⑥



写真⑪



写真②



写真⑦



写真⑫



写真③



写真⑧



写真④



写真⑨

